

第一回 こののはじまり(一)

ここ竹山に暮らし始めてもう五年になる。

三十五年経営してきた事務所を、優秀な後継者に恵まれたことで事業承継をしたのが二〇一七年。それからご隠居を決め込み、今の暮らしがはじまった。仕事の傍ら事務所のホームページを企画編集しているS君から、「石塚さんも、何か書きませんか？ 得意のワークショップのノウハウ集でもいいけれど、せっかくなら竹山での暮らしとか。」と提案された。ご隠居暮らしはよほど暇そうに見えたのか、はたまた、昨今のコロナ禍の影響もあり引きこもりがちになった私の脳みそを案じてくれたのか。

ご隠居暮らしといっても、ここで生活するにはやらなくちゃならないことも多く、結構忙しいのだ。ただ、日頃ぶっきりぼうな物言いをするのは裏腹に、優しい気配りを絶やさないとS君からの提案なので、何かの気遣いかと無視するのも気が引けて少し考えてみることにした。

これまでの癖で、構成はどうするか、見出し小見出しをあれこれ考えてみたり。まあ、それくらいなら良いが、久しぶりに原稿用紙に手書きで書いてみようかとか、書くのは万年筆が良いかな、などと考える始める始末。なんだかんだって暇なのか。

そうこうしているうちにだんだん面倒臭くなってしまった。

そもそも、なにか特別の思いを持つてこの暮らし始めたわけではない。単に偶然が重なってこんなことになっただけなのだ。これが、長年の夢がかなってリタイア後、自然に囲まれた田舎暮らしができるようになったというのであれば、書きようもあるがそうでもない。なんせ、結婚してからこのかた比較的大きなS市の都心から離れたことがなく、ついこの間まで、かなり古くなってしまったマンションを手放して人生最後の買い替えをしようと、まちなかの便利な場所ですらいろいろ物色していたぐらいだ。はたまた、現代の暮らしや経済のあり方に深い疑問をもち自然との共生や自給自足の生活を目指したわけでもない。それならそれで書くことはたくさんあるのだろうか。

それに、書き出すとどうしても暮らし自慢のような内容になってしまいそうなものも気が乗らないことのひとつだ。他人の自慢話につきあうほどつまらないことはないし、書き方によっては腹がたつこともある。そうならないように意識してもそうならない可能性があるのが、ここ竹山での暮らしなのだ。

まあ、あれこれ考えることはあるのだけれど、この最初に戻ればS君の私への気遣いなので、自分の脳トレと思って書いてみることにした。

書くにあたって筋立ては考えないことにした。思いつくことを流れに任せて書き綴るのなら今日にでも始められる。そのためには短文で区切りがつくのが良い。例えるとその道の方に失礼だが、新聞小説のボリュームで書くのが良さそうな気がした。それがこれになる。結果的に挿絵的なものを添えるという余計な手間が増えてしまったが。さて、どこまで続くものか。とにかく三回で終わるということにはしたくないが、果たしてどうなるか。

